

く貧しい信者の常例の避難所で「乞食廣場」と呼ばれてゐる。

風の一杯たかつた、丈の高い瘠せた兎獵犬が私の傍に來て、周圍を意地悪さうにうろつく。私は廊下の柱に倚りかゝつて、努めて落ち着き拂つた様子を、誰も相手にせず、廣場の色のついた舗石の上で跳ねあがる雨を眺めてゐた。浮浪者達は一塊りになつて地面に寝轉んでゐる。私の傍では相當綺麗な若い女が、首筋や脛も露はに、大きな鐵の輪を腕首と足首に付けて、憂鬱な鼻聲の三諸音で妙な歌を歌ふ。歌ひながら赤銅色の眞裸の小さな赤兒に乳を飲ませてゐる。そして、空いてゐる方の腕で、石の挿鉢の中の大麥を砕いてゐる。ひどい風に吹きつけられて雨は時々乳母の足を浸し、乳呑子の身體を濡した。浮浪の女は少しも氣にとめず、大麥を搗きながら、そして乳房を哺ませながら、突風の下で歌ひつゞける。

嵐が靜まる。霽れ間を利用して、私はこのミラクル廣場を急いで立ち去り、シドマールのうちの晩餐へと出かけた。頃合の時刻だ……廣場を横切る時に又先刻のユダヤの老人に會つた。彼はその代辯人に倚りかゝつてゐる。證人達が後から愉快さうに歩いて來る。いやらしいユダヤ人の子供が周圍で飛び跳る……皆晴々した顔をしてゐる。代辯人が事件を引き受けたのだ。彼は裁判所で二千フランの賠償金を要求するだらう。

シドマールのところの贅澤な晩餐、——食堂は噴水が二つ三つ潺々と落ちてゐる、モール風の優雅な中庭に臨んでゐる……ブリス男爵にでも薦められる土耳其式の素晴らしい料理だ。色々の

皿の中で、私の注意を引いたのは巴且杏入りの雛鶏、ヴァニラ入りの肉團子、肉を詰めた龜、——少しこつてりしてゐるが洗練された味だ——又、「酋長煎餅」と呼ばれる蜜入りのビスケット……酒はシャンパンばかり。マホメット教徒の法律を破つて——尤も、給仕達が背中を見せてゐる時だつた——シドマールはそれを少し飲んだ……食後、私は主人の部屋に通つた。ジャムやパイプやコーヒーが運ばれる……この部屋の家具は至つて簡單である。長椅子と座とがあり、奥の方に非常に丈の高い大きな寢臺があつて、その上に金の刺繡を施した赤い小さな薄團が散らばつてゐる……壁のところには、ハマチと云ふ元帥の勳功を描いた土耳其の古い繪が懸つてゐる。土耳其では畫家は一つの繪に一色の繪具しか用ひないらしい。此の畫面には緑が用ひてある。海、空、船、ハマチ元帥自身も皆緑だ、しかも何といふ綠色だ！……

アラビヤの風習は退出の早きをよしとしてゐる。私はコーヒーを飲み、パイプをふかすと、主人に夜の安穩を祈つて、彼とその女達を後にした。

何處でこの夕を終らうか、床に就くには早過ぎる、騎兵の喇叭もまだ歸營を告げない。その上、シドマールの金の小蒲團が周圍で空想的な踊りを踊つて、眠りを妨げる……劇場の前に來た、一寸入らう。

ミリアナの劇場は昔の糧秣商であつて、どうやらからやら劇場にはなつてゐる。幕間に油を入れる大きなケンケ式洋燈が釣燭臺の役をする。土間の後方は立見で、前方は腰掛けて見る。二階

棧敷は藁椅子付きだといふので鼻が高い……部屋の周囲には、暗い、圍ひのない長廊下がある……往來にゐるやうな気がする、萬事がさう思はせるのだ……私が行つた時、芝居はもう始まつてゐた。驚いたことには役者達は相當にやる、といつても男優のことだが、彼等は派手に動き、元氣がある……殆んど皆素人で、歩兵第三聯隊の兵士達だ。聯隊もこのことが得意で、每晚彼等に拍手を送りにやつて来る。

女優の方は、いやはや……これはやつぱり何時もの通りの田舎の小芝居の女性で、きざで誇張があり、虚偽がある……然し、この女達の中で二人、私の興味を引いたのがあつた。ごく若い、こゝで始めて舞臺を踏んだ二人のミアナのユダヤ人である……両親が客席に居て喜んでゐるらしい。彼等は娘達が此の商賣で何千といふスペイン銀貨を得るだらうと確信してゐる。百萬長者で喜劇女優のユダヤ人ラシエルの話が、既に近東生れのユダヤ人のところに擴まつてゐる。

舞臺のこの小さな二人のユダヤ人位可笑味があり、又ほろりとさせられるものはない……白粉を塗り紅をつけ、首や肩を露はに、すつかり硬くなつて、舞臺の隅におどおどして立つてゐるのだ。彼女達は寒がり、羞しがる。時々、譯もわからずにある文句を無茶苦茶に話す。そして物を云つてゐる間、ヘブライ民族特有の大きなこの女達の眼は無表情に客席へ注がれてゐる。

私は劇場を出た……周囲の暗黒の中で、廣場の隅に叫び聲を聞いた……きつとムルト人が刀を振つて黒白を争つてゐるのだらう……

私は城壁に沿うてゆつくり宿に歸つた。蜜柑とチユイアの木の素晴らしい香氣が野原から上る。空氣は和やかであり、空は殆んど澄んでゐる……あちらの道のはづれには、昔の寺の墟である古壁が幻のやうに立つてゐる。この壁は神聖である。毎日其處へアラビヤの女達が「奉納物」を懸けにくる。それはアイクやフータスの端とか、褐色の髪を長く編んで銀糸に結びつけたものとか、外套の裾などである……それが皆淡い月光の下で、夜の生温い風に吹かれてゐる……

蝨はっ

斯た

今一度アルジェリヤの追憶を語つて、それからまた風車小屋に立歸らう……
あのサエルの農家に着いた晩、私は眠られなかつた。土地が始めてあること、旅の不安、狼の吠聲、その上苛立たしい、じり／＼迫る暑さ、蚊帳の網目を通る風が一吹きもなささうなひどい息苦しき……明け方、窓を開いた時、緩やかに動く重たい夏の霧が周囲を黒と薔薇色に縁どられて、戦場に浮ぶ煙雲のやうに空中を漂つてゐた。木の葉一枚揺れてゐない。下に見える美しい庭には、葡萄酒に甘みをつける太陽を一杯に浴びて、斜面にとろまだらな葡萄の樹、物蔭に陽を避けた歐洲産の果樹、丈の低いオランジェ、細かく長い列を作つたマンダリニエ、どれもこれも等しく嵐の前の動かぬ木の葉のやうに沈んでゐる。あの軽いこまかな葉の房を、絶えずそよ風に纏らせる、例の淡緑の葉の長い芭蕉もまた、鳴りを鎮めて、まつすぐに揃ひの羽飾りのやうに立つてゐた。

季節に應じて、各々異國の花や實をつける、世界中の木が集まつた此の素張らしい植物園を、私は暫らく眺めてゐた。麥の畑とキルク樫の木立との間に一筋の流れが輝いて、この息苦しい朝、見るものの心を爽かにする。モール風の拱廊と、曙に眞白に光る露臺を備へた此の美しい農家、その周囲に集まる既と納屋、あらゆるものが豊富に、且つ整頓されてゐるのを見て、かうした善良な人々が、このサエルの溪谷に引移つてきた二十年前の頃を想つた。當時彼等の見出したものといへば、道路入夫の見窄らしい假小屋一棟、乳香樹と矮小な棕櫚の立並ぶ未墾の土地だけであつた。總てを創造し、總てを建設しなければならなかつた。絶えずアラビヤ人は反抗する、それ

を射撃するために鋤を地に置かねばならぬ。續いては病氣、眼病、熱病、作物の不作、無經驗に因る暗中摸索、無方針でやかましい施政に對する闘争。その努力！ その疲勞！ 監視をゆるめる暇もない。

苦境の時代が終り、辛苦して富を獲ち得たが、今尙農家では主人も主婦も二人とも、一番に起きる。朝こんなに早く私は、彼等が労働者にやるコーヒの加減をみながら階下の大きな臺所を行つたり來たりする足音を聞いた。やがて鐘がなり、少し経つと労働者達が往來に並んだ。ブルゴーニエの葡萄造り、襪襦を着て赤い土耳其帽を被つたカピリーの百姓達、素足のマホンの土方、マルト人、リュック人、何れも人種がちがひ、差圖するの骨が折れる。農家の主人は戸口の前で彼等の一人一人に向つて、多少荒つぽい調子で、言葉少なにその日の仕事を割り當てゝやつた。それが終ると、この人のいゝ男は頭を擧げ、心配さうに空模様を見た。そして、窓際にゐる私を見つけてかう云つた。

——こんな日和ぢや耕作は駄目です……それシロコが吹く。
全く、開閉する籠の口から出るやうに、燬けた、むつとする風が太陽の昇るに従つて南からどつと寄せて來た。何處に居たらいいのか、どうなるといふのであらう。午前中はこんな風で過ぎた。私達は話す元氣もなく、動く勇氣もなく、廊下の塵の上でコーヒを飲んだ。犬は冷たい鋪石を求めて、暑さに茄つたやうな格好で長々と寝そべつてゐる。晝食で私達は幾分か元氣ついた。品數の多い、風變りの食事で、鯉、鮎、猪、針鼠、スタウエリーの牛酪、クレシアの葡萄酒、亞

米利加梨、バナ、私達を圍んでゐる自然同様、複雑極まる全世界の料理なのだ……食卓を離れやうとしてゐると、籠のやうな庭の暑さから避けるために閉めた出入窓の方で、突然けたましい叫び聲が響いた。

——ばつた！ ばつた！

主人は凶報を受けた人のやうに、眞蒼になつた。私達は急いで其處を出た。十分間といふものは、今し方あれほど静かだつた家の中で、忙がしい足音がひびき、寢床を離れる騒ぎに消されて、はつきりしない聲が聞える。下僕等は、玄關の物かげで晝寝をしてゐたが、棒だの熊手だの、麥打棒だの、手元にあふ金屬の道具、銅の釜、手鍋、スーブ鍋、などを鳴らしながら表へ飛び出した。牧人は牧場の喇叭を吹いた。航海用の法螺貝や狩の角笛を鳴らす者もある。無茶苦茶な恐ろしい騒ぎだつた。そしてその騒ぎに被さるやうに、近隣の部落から馳せつけたアラビヤ女が鋭い調子でイユーイユーと叫ぶ。大きな物音をさせたり空気を鳴り震はせれば、充分ばつたを遠退かして、下りてくるのが防げるものと見える。

だが一體、その恐ろしい蟲けらと云ふのは何處にゐるのだらう。暑さに震へる空には、森の無数の梢を互る嵐のやうな音をたて、銅色の、緻密な、霰を孕んだ雲かと思はれるのが、地平線上に現れたのを見るばかりであつた。それがばつただつた。バサ／＼した翼を擡げて支へあひ、一團となつて飛んでゐた。私達の叫喚、努力の甲斐もなく、雲は絶えず大きな影を原に落としたがら進んで来た。やがて私達の頭の上に来た。忽ち縁の方から房が下り、裂目が出来たかと思ふ

と、霧雨のバラ／＼と降り出すやうに、はつきりと茶褐色をおびたいくつかの房がはなれた。續いてパツと雲が裂けて、蟲の霰は、隙もなくざわ／＼と落ちてきた。見渡すかぎり畑はばつたに覆はれた、大きなばつた、指ほどの太さのばつたに。

其處で虐殺が始まつた。壓し潰し、薬を寸断するいやな物音。鍬だの鶴はしだの、鋤だので、人々はこのもく／＼動くばつたの層を掘り返した。殺せば殺すほど蟲は殖える。層をなして塊り、長い肢を纏らせてゐる。上にゐるのが苦し紛れに跳ね上り、この變つた仕事のために鋤につながられた馬の鼻面に飛びつく。農家の犬や部落の犬は畑中を飛びあいて、ばつたに躍りかゝり、怒つて噛み砕く。この時、喇叭隊を先頭にたてた土人の狙撃兵が二中隊、不幸な移住民を救助にやつて来た。虐殺が趣を變へた。

斯

ばつたを潰す代りに、兵士達は地面に長い筋のやうな形に火薬を撒いて、火を點けた。

殺すのに疲れ、悪臭に胸を悪くして私は家に歸つた。家の中にもばつたは戶外と殆んど同じ位ゐた。開いてゐる戸、窓、煙突の口から入つたのであつた。板壁の縁だの、すつかり蝕まれた窓掛の中を、ばつたは逼つて歩き、下に落ち、飛び、そして一層醜くさを増す老大な影を映して、白壁を攀ぢ登つてゐた。その上、到る處にあのぞつとするやうな臭がする。夕食には水も使へなかつた。用水桶、泉水、井戸、養魚池、皆ばつたに侵されてゐた。夕方、私の部屋で、曩に澤山殺したのに、尙家具の下に蠢く音や、豆の莢が炎暑に會つてはじける音と同じやうな翅のばりばりいふ音をきいた。その夜も亦、私は眠れなかつた。私ばかりか、家の周囲のものも皆起きてゐ

蟲

た。焔が野原の端から端へ、地面とすれ／＼に流れてゐる。狙撃兵は絶間なく殺してゐる。翌朝、私が前日のやうに窓を開けた時、ぼつたの群は立退いてゐた。然し、あとに残した廢墟といつたら！一輪の花一本の草もない。萬物盡く黒く、齧られ、焼くづれてゐた。芭蕉も杏も、桃も蜜柑も、剥き出しの枝ぶりやつと見分けがつかばかり。木の生命である魅力もなく、葉のゆるぎもない。人々は水の樽や用水桶を洗つてゐた。到る處で労働者達は、蟲の残して行つた卵を殺すために、地を掘つてゐた。どの土塊も掘り返され、細かく潰された。かうして荒れ果てた肥沃な土の中に水々しい無数の白い根が出てゐるのを見ると、胸が一杯になるのであつた。

ゴ―シエ―神父の保命酒

——まあ、一杯。味をどう思召す。
と、一滴づつ、まるで眞珠を數へる寶石商人のやうにこまやかな注意を拂つて、司祭グラヴ
ンは、金色を帯びて燃えるやうに輝く旨さうな緑の液體をぼつちり注いでくれた……胃袋が好い
氣持に暖かくなつた。

——ゴージェ神父の保命酒ですよ。我がプロヴァンス地方の喜悅と健康の源泉です。と、先生
得意さうに語り出した。貴方の風車から二里ばかりのプレモントレの修道院で造つてゐます……
まあ世界中のお酒の中でこれに及ぶものはありますまい……それに面白いんですよ、このお酒の
由來がね！ まあ聞いて下さい……

かう云つてごく卒直に、何の悪意もなく、キリストが十字架を負うて歩く小さな繪の並んでゐ
る、白法衣のやうにきちんとした綺麗な明るい窓掛の下つた、さつぱりした静かな自分の家の食
堂で、お坊さんは私に極く僅か懐疑的な、ほんの少し不敬に當る短い話を、エラスムスカダスシ
ーの話のやうなやり方で始めた。

——二十年ばかり前、プレモントレの僧、或はむしろプロヴァンスの人達のいふやうに白衣僧
達は、非常な困窮に陥りました。もし此の時代の彼等の住居をごらんになつたなら貴方の心は重
くなつたでせう。

——大きな壁もバコームの塔も砕れ落ちてしまひ、廻廊の周圍にはすつかり草が茂つて、小柱
は割れ目か出来、壁の凹みにある聖人の像は缺け頽れてゐました。無事な窓ガラス、満足な戸は
一つだつてありません。中庭や禮拜堂にはローヌ嵐がカマルグを吹き捲るやうに吹き荒んで、
蠟燭を消し、ガラス窓の鉛の枠を壊し、聖水盤の水を溢しました。しかし一番痛ましいのは、空
つぼの鳩小屋のやうに静かな僧院の鐘撞堂と、鐘を買はうにもお金がないので、曉の勤行を知ら
せるのに、拍子木を叩かねばならぬ坊さん達でありました！……

氣の毒な白衣僧達！ 聖體祭の行列の時、つぎの當つた外套を着て香瓜と西瓜を食べて生きて
ゐる蒼白く弱々しい彼等が悲しさに練り歩き、その後から僧院長が頭を頂垂れ、金の刺げた笏
杖と蟲に喰はれた白い毛糸の僧帽を日に曝すのを恥ぢ入つてゐる様子が、今でも眼に見えるやう
です。居並ぶ信徒團の婦人達はこれを氣の毒がつて涙を流し、又、太つた旗持ち達は可哀さうな
坊さん達を指差しながら極く低い聲で嘲笑しました。

——椋鳥はかたまつて出かけると餌にありつけない、つて。
といふわけは、白衣僧達は、羽が生えて世界中を飛廻り、各々自分の望む所へ餌を探しに行つ
た方がよくはないか、と考へるやうになつたからです。

ところで或る日、この重大問題が僧侶會議で議論されてゐる時、院長の許へ、教弟のゴージェ
ー坊が會議で意見が述べたいと云つてゐる、といふ知らせがきました。御參考までに申しあげて
おきますが、此のゴージェー坊といふのは修道院の牛飼ひなんです。即ち、鋪石の隙間に生えて
ゐる草を探す疥せこけた二匹の乳牛を追ひながら、廻廊の穹窿から穹窿へと歩き廻つてその日そ

の日を過してみました。十二歳までベゴン婆さんと呼ぶボアの地方の怪しげな老婆に育てられ、それから修道僧の許に引取られて、此の不幸な牛飼の覺えたことは、獸を追ふ事と、主の祈りを暗誦することだけでした。それもプロヴァンス語で誦へたのです。なぜなら彼は物覺えが悪く、その切れ味は、せいぜい鉛の刀位でした。又彼は少し空想家ではありましたが、熱心なキリスト信者で、喜んで苦行帯を付け、強い信念の下に規律に服し、よく働きました！……

單純で粗野な彼が會議室に入つてきて、片足を引いて一同に挨拶をするのを見ると、院長も坊さん達も會計係も皆笑ひ出しました。これは彼の胡麻鹽頭の善良な顔が、山羊鬚をつけて愚かさうな眼付で何處かに現はれる時、何時も起ることでした。ですからゴーシェー坊はびくともしませんでした。

神父諸子、と橄欖の核の數珠を捻りながら、朴訥な調子で云ふことには、いかさま空樽こそ、一番いふ音を出すものですわい。このからつぼの貧しい頭を絞つたお蔭で私達みんなの苦しみを切抜ける手段を見附けたと思つてみますが……

——かういふ譯です。私が小さかつた時、私を育ててくれたあの人の好いベゴン婆さんを御存じで御座います。神様この厄介な婆さんの魂をお護り下さい！ 飲んだあとではとても淫らな歌を歌つたものです。さて皆さん、ベゴン婆さんは存命中コルシカ島の年寄のつぐみと同じ位、いやそれ以上山の草について知つてみました。そこで婆さんは死ぬ少し前、私と一緒にアルピーニの山へ採りに行つた藥草を五、六種混ぜて何とも云へない旨い藥酒を造つたのです。そ

れから随分長く経ちました。然し聖オーガスチンのお助けと院長殿のお許しがあれば私は——よく調べて——この不思議な藥酒の組成法を見附けることが出来ませう。そして早速瓶に詰めて少し儲けるやうに賣ればいゝのです。やがてはトラップやグラランドの坊さん達のやうに、無難に金が溜りませう……

最後まで話を続けることは出来ませんでした。院長は立ち上つて彼の首つ玉にしがみつくと、坊さん達は手を握るし、會計係は他の誰よりも感動して、ほろ／＼に解れた衣の裾に恭しく接吻をしました……それから皆又席に戻つて評定し、直ちに衆議一決、ゴーシェー坊がその藥酒の製造に全身を打ち込めるやうに、牝牛をトラシブル坊に委ねることとなりました。

此の善良な坊さんがベゴン叔母の製造法をどうして見出すに到つたか、どれほど大きな努力の結果か、どんなに度々夜業をしたか、さういふ話は傳はつて居りません。たゞ確かなことは、六ヶ月の後にはベール・ブランの保命酒が既に弘くその名を知られて居りました。アヴィニョン地方全部とアル、地方全部で、「食料庫」の奥の、煮葡萄酒の壺と瓶詰の橄欖の實との間に、プロヴァンスの紋章の封印を付け、坊さんが酒を飲んで陶然としてゐる銀の貼札を貼つた、褐色の小さな土瓶のない農家や納屋はありませんでした。此の保命酒の流行のお蔭で、プレモントレの家は忽ち豊かになりました。パコームの塔も再興し、院長は新しい僧帽を被り、教會には細工のこまかい綺麗な窓ガラスが出来ました。美しい彫刻を施した鐘撞堂で復活祭の朝、大小の鐘が皆一

緒にゴーンゴーンと鳴り響くやうになりました。

不作法なために會議の席を賑はせてゐた、僧籍に屬しない、あの氣の毒なゴーンゴーン坊は、修道院では問題にならなくなりました。以後はたゞ名僧知識のゴーンゴーン神父として知られ、僧院の細かい面倒な仕事からすつかり離れて、終日その酒造場に籠り、一方三十人の僧は山中を駆け巡つて彼のために香の高い草を探しました……誰一人、院長でさへも入る權利のない此の酒造所は、坊さん達の庭の一番隅にある、打棄てられた古い禮拜堂でした。人の好い神父達の單純さから、此の場所は何か不思議な恐ろしいところとなつてゐました。もしどうかしたはづみに、大膽で物好きな若僧が、壁に絡まる葡萄の樹を攀ち登つて入口の上の菊形窓まで達しても、籠に身を屈め、秤を手に持つた、占者のやうに願鬚の長いゴーンゴーン神父を見ると、驚いて忽ち轉げ落ちました。それにゴーンゴーン神父の周囲には赤砂石の首の曲つた瓶、大きな蒸溜器、水晶の蛇形管などが一面、異様に散らばつてゐて、ガラス窓を通す赤い光の中に妖しい焰を上げてゐました……日の暮、最後の御告の鐘が鳴る時に、此の神秘的な場所の扉が秘かに開かれて、神父は夕の勤行のために教會へ行きました。彼が僧院を通るとき、どんなにもてはやされたことでせう！ 坊さん達はその通り路に垣根を造りました。そして

——靜かに！……秘法を辨へておいでだ！……と云ふのでした。

會計係はその後を従いて行つて頭を低げて話をします……皆が詔つてゐる中を、神父は鑄の廣い帽子を光背のやうに阿彌陀に被つて額を拭き拭き、自分の周囲にある蜜柑の木を植ゑた大きな

廣場、新らしい風見の廻る青屋根、そして白く輝く廻廊の中、——優美な花模様の小柱の間を、

——新らしい衣を着た坊さん達が、二人づゝ並んで平和な顔をして歩いてゐるのを、満足さうに眺めながら通つて行きました。

これは皆私のお蔭なのだ！ と心の中で神父は思ひました。そしてその度にこの考はむら／＼と傲慢な氣持を起させました。

可哀さうに、彼はこのために十分に罰せられました。やがてわかります……

ある晩、勤行の最中、彼が非常に興奮して教會に來たと思つて下さい。眞赤な顔で息を切らし、外套をはすに引つかけて、聖水を取る時に袖を肘まで濡らした程心を亂してゐました。始めのうちには遅れたから周章で、おいでなのだらうと思ひましたが、しかし祭壇に禮拜をする代りに、パイプオルガンや説教壇に最敬禮をしたり、風を切るやうに室内を横切り、自分の席を探すために五分間も内陣を徘徊し、一度席に収まると、信心深さうに微笑みながら左右に頭を下げるのを見て、陪者席では驚きの私語が傳りました。信者から信者へ、ひそ／＼と話されました。

——ゴーンゴーン神父はどうなさつたらう……ゴーンゴーン神父はどうなさつたらう、と。我慢が出来なくなつた院長は、沈黙を命ずるために、二度までも、石の上を杖でたゞきました……向ふの内陣の奥では讀經が続けられてゐますが、追唱には力が缺けてゐました……突然、アヴェ・ヴェルムの最中に、ゴーンゴーン神父は僧座に仰向けに倒れて、張り裂けるやう

な聲で歌ひ出しました。

——パリに居ります、白衣僧、

——バタテンバタタン、タラペンタラパン……

——同色を失ひ、總立ちになりました。

——外へ出しまへ……悪魔に取憑かれたのだ！ と叫ぶ聲。

修道僧は十字を切る。院長の杖が舞ふ……しかしゴーシェー神父は何一つ眼にも耳にも入りません。そこで憑きものを拂はれる男のやうにじたばたし、一層聲を張り上げて、バタテン、タラパンを續ける彼を、二人の腕つぶしの強い坊さんが、内陣の小さな戸口から、引きずり出さねばなりませんでした。

翌日の夜明に、不幸な男は院長の祈禱所に跪いて、涙を溜のやうに流して懺悔をしてみました。

——お酒のためです、院長様、お酒にやられたのです。と胸をたゞきながら彼は云ひました。

——まあ、まあ、ゴーシェー神父、氣を落付けて。そんなことは皆、白露の陽を浴びて乾くやうに、消えてしまひます……とにかく貴方が思つてゐるほどの悪い行ではありません。勿論歌が少し……どうも……いやなに、若い者達の耳に入らなけりやいゝんですがね……とところで一體どうしてこんな事が起つたか、聞かせて下さい……お酒を試しながらでせう？ 手がすべつたとい

ふわけですね……ええ、よくわかりますよ……火薬を發明した僧ジュワルツのやうに、貴方も發明の犠牲となつたんです……ねえ、貴方、どうしてもこの恐ろしいお酒の味は、自分が見なければならぬのですか？

——どうも仕方がありません……試験管はアルコールの強さ、割合を計つては呉れますが、肝腎の舌ざはりをよくするといふことは、私の舌に便るより外はないので……

あゝ！ さうですか……然し少し私のいふことを聞きなさい……そんな風に必要に迫られてお酒を味はふ時には、美味しいと思ひますか？ 飲むのが楽しみですか？……

——情ないことにはその通りなんです……と眞赤になつて不幸な神父は答へました……こゝ二晩、香りの素晴らしいこと……これはきつと悪魔のなす業です……それで私は今後は試験管だけを、用ひやうと決心しました。お酒にそんないゝ味がなくなつて、眞珠の泡が澤山出来なくなつても仕方がありません……

——まあ慎重に、と急いで院長が遮りました。進んで顧客の氣を害ねるやうなことをしてはなりません……こんな氣まづいことがあつたからには、何よりも心がけていたゞきたいのは用心をなさることです。ね、どの位あれば味が解りますか……十五滴か二十滴でせう……二十滴としませう……もし二十滴で悪魔が貴方を捕へることが出来るなら、それは餘つ程頭のいゝ悪魔だ……又、どんな椿事が起らないとも限りませんから、以後は教會に來なくてもいゝことにしてあげます。夕方の勤行は酒造所でなさい……で今は心を落付けてね、神父さん、そして特に何滴かよく

勘定なさい。

哀れ、この氣の毒な神父さんが滴を數へる甲斐もなく……悪魔が抑へて放しませんでした。奇怪な勤行が酒造所で聞えるのでした！

晝間は未だ何事も無かつたのです。神父は相當に落付いてゐて、焜爐、蒸溜器を整へ、質のいゝ、灰色の、ギザ／＼のある、香の高い、日をよく受けたプロヴァンス州のあらゆる草を丹念に擇りわけました……しかし夕方、藥草が煎じられ、お酒が赤い銅の大きな鍋の中で生温くなると、氣の毒な人の獻身的な行爲が始まるのでした。

——十七……十八……十九……二十……

滴は吹管から金鍍金のコップの中に落ちました。この二十滴を神父は別にうまいとも思はないやうに一息で飲み干しました。飲みたいのは二十一滴目です。あゝ！ この二十一滴目……其處で誘惑から逃れるために、彼は實驗室のずつと端の方へ行つて一心に主の祈りをしました。しかしまだ温いお酒からはよい香りを籠めた細い煙りが立ち昇り、彼の周圍を漂つて、どうでもかゝりでも彼を鍋の方へと引張つて行きました……液體は美しい金綠色を呈してゐます……その上に身を傾け、鼻の孔を膨らまして、神父はごく靜かに管で搔廻しました。エメラルドの波が轉がす細かい砂金の輝く中に、ペゴン婆さんの眼が見えるやうでした。彼を眺めて、

——さあ！ もう一滴！ と云つて笑つてゐるキラ／＼光る眼か……

そして一滴、もう一滴と不幸な男はコップになみ／＼と注いでしまひました。すると、力が盡きて、大きな肘掛椅子に腰を落し、體をぐつたりとさせ、目蓋を半分閉ちて、氣持のいゝ後悔の念に驅られながら、

——あゝ、どうせ地獄に墜ちるんだ……地獄に墜ちるんだ……と低い聲で云つて、チビリチビリとその罪を味ひました。

一番恐しいのは、この悪魔のやうな液體の奥底に、（いかなる妖術のなすところか知りませんが、）ペゴン婆さんのいやな歌をいろいろと又見出すことでした。『小さな叔母さま三人が、酒盛をする御相談……』又、『アンドレ主のベルジッ娘一人ぼつちで森へ行く……』そしていつでも白衣僧のお定まりの、『バターテンバタータン』です。

翌日、隣の僧室の人達から、意地悪さうに、

——おい、おい！ ゴーシエーさん、貴方は昨夕床に入るとき、頭に蟬でも入つてゐたんですか、と云はれてどんなに恥ぢ入つたでせう。

涙を流し、失望落膽し、斷食をし、荒衣を着け、規律を守りました。然し、お酒の悪魔にはどうすることも出来ませんでした。そして毎晩同じ時刻に、悪魔が乗り移つて來るのでした。

この間に註文は主の恵みの豊に注ぐが如く、雨と僧院へ降つて來ました。ニームからも、エキスからも、アヴィニョンからも、マルセイユからも……日一日と修道院は一寸製造所めいた様子

を帯びて来ました。荷造り僧、札貼り僧、他のものは字を書いたり運搬したり……神様への勤行が怠られて、あちこちで少しづつ鐘が鳴らなくなりました。しかし土地の信者達はそのために何の損もしませんでした、それはこの私が受合ひます……

ところで或る日曜日の朝、會許係が一年の總勘定を僧會員の眞中で讀みあげてゐる時、そして善良な坊さん達が眼をかゞやかし、唇に微笑を浮べてそれを聞いてゐる時、ゴースニー神父がこの會議の最中に飛び込んでかう叫んだのです。

——おしまひだ……もうやらない……牝牛を返して下さい。

——一體どうしたんです、ゴースニーさん、と事の仔細をうす／＼感付いてゐた院長が尋ねた。

——どうしたのですつて、院長様？……私は地獄で炎に焼かれ、熊手で突かれるやうなことをしてゐるのです……お酒をやります、まるで破落戸のやうに飲むんです……

——でも何滴もお數へなさい、と云つたでせう。

——ええ！ その通りです、何滴か數へるつて！ しかし今はコップに何杯、と數へなければなりません……ええ、さうなんですとも。毎晩徳利瓶に三杯……こんなことが続けられないのは充分お解りでせう……だから誰かお望みの方にお酒は造らせて下さい……私がまだやるつていふんなら、神様の火で身體が燃えつちまへ！

もう坊さん達は笑ひませんでした。

——けれど、ひどい人だ、貴方は私達を破産させておしまひになる！ と會計係が大きな帳簿

を振りながら叫びました。

——私が地獄に墜ちる方をお望みですか！

その時院長が立ち上つて、

——皆さん、と牧師用の指輪が輝いてゐる白い美しい手を伸して、すつかり具合よくをさめる方法があります……ねえ、貴方、悪魔が貴方を誘惑するのは晩方でせう？……

——ええ、院長様、きまつて毎晩……だから、夜がやつてくると、失禮ですが、カピトウの驢馬が荷鞍が来るのを見た時のやうに、私は汗だくになるのです。

——宜しい！ 安心なさい……今後は毎晩、勤行の時、私達は貴方のために、寛大の徳の溢れた、聖オーガスチンのお祈りを誦ませよう……さうすればどんなことがあつても貴方は安全です……これは罪を犯してゐる時に、その罪の赦免を乞ふのですから。

——さうですか！ それは有難うございます、院長様！

そして、それ以上は何も聞かずに、ゴースニー神父は蒸溜器の方へと雲雀のやうな身軽さで歸りました。

實際その時から毎晩、最後の勤行がすむと司祭は缺かさずかう云ひました。

——我々信徒の爲、その魂を犠牲にする氣の毒なゴースニー神父のために祈りませう……オレムス、ドミネ……

そして暗い外陣で禮拜する白い頭巾の上を、お祈りの言葉が、雪の上を渡る軽い北風のやうに、

顫へながら走つて行きました。その時、あの僧院の片端の、酒造所の灯を映す窓ガラスの後では、ゴシエー神父が聲を限りに歌つてゐるのが聞えるのです。

『パリにござる、白衣僧、

パタテンパタタン、タラベンタラバン、

パリにござる、白衣僧、

若い尼御前踊らせる

トラントラントランお庭の中で、

若い尼御前……』

……此處まで来ると、人の好いお坊さんはさも恐ろしいといふ風に話を止めて、
——神様お赦し下さい！ 教區の人達が、私の云つた事を聞いたら一大事です！

カマルグ紀行

一、出 發

別荘の賑やかなさわめき。使の者が番人の言傳を齎したのだ。半ばフランス語、半ばプロヴァンス語の口上では、既に「鷺」「千鳥」の美事な渡りが二三回あり、「春の渡鳥」の渡来もあつたといふことである。

『是非御同行を！』と親切な、近隣の人々の手紙があつて、即ち今朝未明五時、彼等の大型の四輪馬車は獵銃、獵犬、糧食を積んで岡の下まで私を迎へに來た。今や一行の馬車は、稍々燥き、霜枯れのアル、街道を行く。橄欖の薄緑はほのかに、柏の濃緑は餘りにも冬めき、あざとく見える師走の朝である。牛小屋の中が蠢めいてゐる。夜明け前に起出て、窓に燈の入つた農家もある。モンマジュール僧院の石彫の中では、まだ眠の醒めきらぬ尾白鷺が、廢墟の裡に羽を搏つ。然し我々は堀に沿ひながら、既に幾人か、小騾馬を小さきぎみに驅けさせて市場へ行く田舎の老婆を追越した。彼女達はヴィル・デ・ポーから來る。六里たつぶりの道を遙々、サン・トロフィーム寺院の踏段に一時間坐つて、山で採つた藥草の小さな包を賣るために……

兎角するうちに、はやアル、の城壁である。鎗を手挟んだ武者が、彼等の丈にも足らぬ斜面の上に、現はれてゐる、古い版畫で見るとやうな、銃眼を剝つた低い城壁である。フランスでも最も美しい町の一つに數へられ、狭い路の中央までアラビヤ網戸の如く張り出した、彫刻のある圓いバルコニー、或はウイリアム短鼻帝とサラセン人の時代を偲ばせる、モール風で尖弓型の小さな

戸口を持つ、古い黒ずんだ家々の並ぶ、この珍らしい小市街を我々は速驅で走り過ぎた。早朝のことゆゑ、戸外には未だ人影もない。ローヌの河岸だけが活氣づいてゐる。カマルグ通ひの汽船が、梯子段の下に、解纜を待つばかりに、鐘を焚いてゐる。褐色の手織の上衣を着た地主達、農家の仕事に雇はれて行くラ・ロケットの娘達が、互に語り合ひ笑ひ興じつゝ我々とともに甲板に上る。朝の烈しい寒氣を避けて、頭から被つた鳶色のマントに、アル、風の高い髪につくりが、頭を粹に且、小さく見せ、それに事でもあれば、面をあげて、笑ふか悪口を浴びせてやりたいといふ、可憐な厚かまさが一寸閃めいてゐる……鐘が鳴り、船が出る。ローヌの流れ、推進機、北西風の三拍子揃つた速力に、兩岸が展開してゆく。片側はクロワ、小石の多い瘠せ野原である。對岸はカマルグ、緑がもつと豊かで、短い草と蘆の茂る沼地を、海まで擴げてゐる。

時々船は左岸又は右岸、中世紀のアル、王國のいひならはしに從へば帝國領、又は王國領の船橋に沿つて停る。今日でも尙、ローヌの古い船乗は、かう呼んでゐるのである。船橋ごとに白い農家と、木立がある。労働者達は道具を荷つて下り、女は籠を抱へ、小橋の上を、胸をそらして下りる。帝國領へ、王國領へ、と次第に船は空き、マス・ド・ジローの船橋に着いて、一行が下船した時は、船中には殆んど人が居なかつた。

マス・ド・ジローとは、バルパンターヌの領主の、古い農家である。我々は迎へに來てくれる、管の番人を待つために、其處へ入つた。天井の高い厨房で、百姓、葡萄作り、羊飼、その手傳等、農家のすべての男達が食卓について、重々しく、口も利かずに、徐かに食べてゐる。給仕は女達

がする。彼女達は後でなければ食べないのだ。やがて番人は幌付二輪馬車で現れた。眞にフェニモニアの作品中に出て来さうな水陸探偵の獵人、密獵監守である。土地の人々は彼を「ルウ・ルウ・デイル」(彷彿人)と呼ぶ。蘆の間に隠れて待ち伏せたり、小さな船の中に身動きもせず、にらめたり、「クレール」(沼)や「ルビース」(灌溉用運河)にかけた魚籠の見張りに餘念のない彼の姿が絶えず朝夕の霧の中に見えるからだ。彼がこのやうに無口に、凝り固まつたやうになつたのは、恐らく絶えず様子を窺ふ、この職業の所爲であらう。然し銃や籠を載せた小さな馬車を走らせて行く間、彼は、幾回渡りがあつたとか、どこに渡り鳥が舞ひ下りたとかいふ狩獵の消息を傳へてくれた。語り合ひながら我々は奥へ奥へと入り込んだ。

耕地を通り過ぎて、いよ／＼荒漠たるカマルグの眞中に來た。見渡す限り、牧場の間に、沼、運河が、厚岸草の中に光る。樺柳や蘆の茂みが、靜かな海面に浮ぶ鳥のやうである。高い木はない。廣野の平坦な、無限の眺めを遮るものはない。所々、家畜の圍場が、その低い屋根を、殆んど地面とすれ／＼に、擴げてゐる。ちり／＼になつて、鹹氣のある草の上に横はり、又は羊飼の褐色の合羽のまはりに、密集して歩く羊の群も、この青い地平線と開豁な空との、限りない擴りに縮小されて、長い一直線を亂してゐない。浪があつても一様に見える海、その海にも似て、この廣野から孤獨、茫漠の感じが立ち昇る。弛みなく、妨げるものもなく吹き捲つて、その力強い息吹に景色を平にし、擴げるかと思えるミストラルに、一層強められて。この風の前には凡てが撓む。如何に小さな灌木と雖も、この風に打たれた浪を、とどめないものはない。何處までも逃げ延びようとする恰好で、南の方へ撓み臥したまふ……

二、小 屋

蘆の屋根、同じく乾いた黄色の蘆の壁、これが小屋だ。獵の集合所はかう呼ばれる。小屋はカマルグ風の建て方で、天井の高い、廣い、窓無しの一室から出來てゐる。日の光はガラス張りの戸口から取る。これは夕方には板戸で閉される。白壁で白く染めた荒塗りの大きな壁に、刀架が銃、獲物袋、沼用の靴を待ち受けてゐる。奥の方には眞物の帆柱の周圍に五つ六つ寢籠が並べてある。帆柱は地面に立てられて、屋根まで届き、屋根を支へてゐる。夜、ミストラルが吹き、沖の浪の音と、浪を近づけその響を運び絶えず募らせる風の音と一緒に、家中が軋る時には、我々は船室に寝てゐるのかと思ひさうだ。

然し小屋が美しいのは殊に午後である。私は麗らかな南國の冬の日を、たゞ一人、樺柳の根が燻る高い暖爐の傍で過すのが好きだ。ミストラルかトラモンターヌの荒れる中に、戸は躍り、蘆は叫ぶ。しかもこれらの動搖は、私を圍む自然の動きの、極く小さな反響なのである。冬の太陽は強大な風の流れに鞭たれ、散り砕け、その光をあはせ又まき散らす。大きな影が美事な青空の下を走る。光はとき／＼に烈しく訪れる、響も亦同様である。羊の群の小鈴が、突然耳に入つたかと思ふと、やがて聞えなくなり、風の中に消えたかと思へば、揺れる戸口から再び返し詞の

やうに、美しく聞えて来る……得も云はれぬ時は、黄昏の、獵に出た人々の歸る少し前である。その時は風も凩いでゐる。一寸外へ出る。大きな赤い太陽が熱もなく燃えて、靜かに沈んでゆく。夜がすつかり潤つた黒い翼で、面を掠めながら舞ひ下りる。彼方の地平線には、闇に包まれて光を磨く赤い星の輝くやうに銃火の光が閃く。暮れ残る薄明りに生あるものは急ぐ。長い三角形を作つた鴨の群が地上に下りるかやうに極めて低く飛んできた。しかし急に小屋にランプが點いたので彼等は遠ざかつた。縦隊の先頭にゐた鳥が首を立て、舞ひ上る。さうして後に従ふものは皆、荒つばい鳴聲を立て、更に高く飛び上つた。

間もなく、雨でも降るやうな夥しい足音が近づく。何千といふ羊が、羊飼に呼び返され、犬に追ひ立てられて、びく／＼しながら秩序なく、圍場へ急ぐのである。犬の亂れた驅足と、喘ぐ呼吸づかひが聞える。私はこの縮れてゐる毛と、メーメーといふ鳴聲の渦巻く中に、すつかり巻き込まれてしまつた。まるで大波のやうだ。その中で羊飼は、躍る浪に影ごと持ち上げられてゐるやうに見える……羊の後に覺えのある足音、陽氣な聲。小屋は満ち、活氣づき、騒がしくなつた。葡萄の蔓が燃える。疲れてゐるものほどよく笑つた。ほんやり快よい疲労に身を委すのだ。銃は片隅に、大きな靴は亂雑に投げ出され、囊はあけられて傍には褐色、金、緑、銀の翼が血に塗れてゐる。食卓の用意が整ふ。旨い鰻汁の湯氣の中に沈黙が、逞しい食慾がもたらす深い沈黙が、續く。それを破るものは、戸口の前で探り／＼椀を甜める犬の恐ろしい唸り聲ばかり……

夜啼は早く切りあげられる。既に火の傍には、これも眼をしばたゞき始めた番人と私としかゐらない。二人は話をした。しかしそれは時々百姓達の交へる短かい言葉を云ひあつたり、燃え盡きた葡萄蔓の最後の火花のやうに短い、すぐ消えるアメリカ・インディアン風の間投詞を交すことなのであつた。やがて番人は立ち上り提燈を點した。私は彼の重い足音が夜の闇に消えてゆくのに耳を澄した……

三、レスペール（待ち伏せ場）にて

希望！ 身を潜めた獵師の待伏せの所、更に、凡てのものが獲物を待ちあぐがれ、胸を轟かす、明暗何れともつかぬ薄明の時を指すには、何といふ美しい名であらう。朝の待伏せは日の出の少し前、夕は黄昏の頃。私の好きなのは後の方、殊に沼の水が何時までも残暉を漂はす水郷にあつては……

時には「ネゴシソ」の中に張場を置く。龍骨のない矮小な船で幅が狭く、一寸でも身動きすると直ぐに横揺れをやる。蘆に隠れて獵師は船底から鴨を待つ。船縁を超えて出るものはたゞ帽子の眼庇、銃身と犬の頭のみである。風の香を嗅ぎ、蚊を咬へとり、或は大きな趾を伸べて、船を一方に傾け、水を入れる犬だ。この待伏せは無經驗の私には複雑すぎる。そこで大概は、皮一杯に裁つてこしらへた大きな長靴で、沼のまん中を、泥を分けながら、徒歩で待場へ行くことにしてゐた。はまり込まないやうに、緩くり用心しながら進んでゆく。強い潮の香がしたり、ひつき

りなしに蛙の飛び出したりする芦を分けて……

やう／＼櫻柳のある小島、乾いた地面の一隅に着いて落ちつく。番人は歡待のつもりで自分の犬を私につけて呉れた。白い厚毛に包まれたビレネー産の巨犬で、獵には水陸ともに第一流の逸物だが、傍に居られるといさゝか恐れざるを得ない。一羽の田鶴が手近なところを通ると、彼は藝術家のやうな長髪の頭を一振りして、眼にまで垂れる軟かな長い耳を後に拂ひ、私を眺める仕方が何だか皮肉にとれる。それから構への姿勢、尾を躍動させる。何か云ひたくてたまらないといふ身振である。

——打つて……打つんですよ！

打つ、あたらない。すると犬は長く寝そべつて欠伸をし、疲れた、失望した、人を馬鹿にしたやうな様子で伸びをする……

さうさ、成程仰せの通り、私は下手な獵師だ。待伏は私にとつては暮れかゝる夕、薄れて水中に没する光、暗くなる空の灰色を、美しい銀色に磨きあげて輝く沼なのだ。あの水の香り、蘆の間に聞える不思議な蟲の羽擦れ、顫へる細長い葉の低い囁きが私は好きだ。時々或る物悲しい調べが、法螺貝の音のやうに、空中を鳴り渡つてゆく。それは魚を漁る鳥が持つ、あの大きな嘴を、水の底に突つ込んで、ルルウと啼く五位鶯である。

鶴の群が頭の上を飛んでゆく……羽の擦れる音、爽かな空氣の中に柔毛の亂れる音、又飛び過ぎて疲れた、小さな骨格の軋る響まで聞える。そのあとはもう何の音もない。夜である。水面に

僅の光を残した深い夜……

忽ち身が慄へるやうな氣がする。後に誰かゐるやうな、むづ／＼した感じがする。振りかへれば即ち良夜の友、——月、あの眞圓い大きな月であつた。始めはあざやかな昇り方だが、水平線を遠ざかるにつれて歩みをゆるめてゆく。

既に第一の光りは私の傍にそれと見分けられた。やがて少し離れてもう一つ……今や沼一面に灯は點いた。一番小さな叢も影を映す。待伏の時は過ぎた。鳥に見付けられる。歸らなければならぬ。青く軽やかに梨地の肌のやうな光の海の眞中を進む。沼や運河の中に我々の一足一足は、天より落ちた星の群と、水底まで射し入る月影を散すのである。

四、赤と白

我々のところからつい目の前、小屋から銃丸が届くところに、似たやうな、しかしもつと鄙びたのが一軒ある。此處に我々の番人が、妻と二人の年上の子供と一緒に、棲んでゐるのだ。娘は男達の食事の面倒を見、釣網を繕ふ。伴は父を助けて魚籠を揚げ、沼の「水門」を見張る。年弱の二人はアル、の祖母の許にゐる。彼等は讀方を覚えるまで、又「第一聖體拜受」の済むまで、其處にゐることになつてゐる。何しろ此處では、教會にも學校にも餘り遠いし、それにカマルグの空氣が、かういふ幼兒には甚だ悪いからである。實際、夏が來て沼は乾いてしまひ、運河の白

い泥が、暑熱に龜裂する時には、島は本當に住まはれないのである。

私は嘗て一度、八月に鴨を打ちに来て、これを目撃したことがある。この灼熱の原野の陰惨な荒々しい光景を私は決して忘れないだらう。處々沼は大きな醸し桶のやうに、太陽を浴びて湯氣を立てゝゐた。底には生き残りのいもり、蜘蛛、水蠅の群が、濕つた場所を求めて蠢いてゐる。其處には黒死病のやうな悪氣、重苦しく漂ふ毒氣の霧があつた。それをなほ數知れぬ蚊の渦巻が濃厚にしてゐた。番人の家では家内中惡寒に慄へ、熱に襲はれてゐた。黄色い引きつった顔、黒い輪の出來た法外に大きな眼をして、三ヶ月の間、熱のある體を容赦なく照りつける烈日の下に、而も寒氣に慄へながら、とぼ／＼と歩かねばならぬ、この不幸な人々を見るのは悲惨であつた。カマルグの狩獵監守の生活こそ悲しく辛いものだ！ まだこの男は妻と子供が傍にゐる。然るに更に二里離れた沼地に一人の馬の番人が住んでゐる。彼は年が年中、それこそたつた一人で暮らし、ロビンソンそのまゝの生活をやつてゐる。自分で建てた蘆の小屋の中にある道具は、柳で編んだ吊床を始め、爐を形する三箇の黒い石、櫻柳の根で出來た腰掛、果はこの不思議な住居を閉める白木の鏡前や鍵に至るまで、一つとして彼の手細工ならぬものはない。

主人公は少くともその住宅と負けぬ位に風變りである。彼は隱士の如く沈黙を守る一種の哲學者で、もちやもちやした濃い眉毛の下に田舎者らしい猜疑を隠してゐる。彼の姿が牧場に見えない時にはきつと戸口に坐つて、子供のやうな、殊勝な勤勉さで、彼が馬に用ひる藥瓶のまはりに入れてある、薔薇色、青、黄色の小冊子の一つを、たど／＼しく讀んでゐる。氣の毒なこの男は

讀むより外の楽しみがないし、又別の本は持つてゐないのである。小屋から云へば隣り同志でありながら、此處の番人と彼とは往來をしない。出合ふことすら避けてゐる。或日私が此の番人に仲違ひの理由を尋ねた時、彼は重々しい調子で答へた。

——意見が違ふからでさあ……彼奴は赤で僕は白だから。

かくの如く、淋しくて近づきになりさうな、此の荒野に於てさへ、同じく無知な、同じく單純な二人の野人、一年に漸く一回、町に出て、アル、の金ピカや鏡を飾つた貧弱なカフェーがまるでフトレメの王宮の如き眩惑を與へるテオクリトスの牛飼の如き此の二人は、その政治的信念の名に於て反目の種を見出したのである。

五、ヴァカレスの湖

カマルグで一番景色のよいのはヴァカレスである。私はよく狩を止めて、海水の湖畔に来て坐つた。陸の中に閉ぢ込められた、大洋の一片と見える小さな海で、陸の虜といふ様が親しみ易いものになつてゐる。この海岸は乾燥、不毛で淋れてゐるが、ヴァカレスの湖は稍高いその岸の上に柔かい天鵞絨の草で眞緑の珍らしく美しい花畑を延べ擱げてゐる。やぐるまぎく、水つめくさ、龍膽、そしてあの、冬は青く夏は赤く、氣候の移り行くにつれて色を變へ、絶えず花を咲かせてその様々な色彩で季節を示す可憐なサラデルの花。

夕方五時頃、日の傾く時刻になると、三里に互る水上には、この湖の森々たる趣を、狭めたり變へたりする、舟一つなく帆影もなく、實に美事な眺めである。少しでも地に弛みがあれば、すぐに涌き出やうとする水の、下から浸み出すのが、至るところ感じられるやうな、石灰質の地面の襞の間に、ボツリ／＼とあらはれる、沼や運河の小やかな美ではない。此處の印象は、壯大豁達である。

遠くからこの波の輝きに引き寄せられて来た鴨、鶯、五位鶯、腹の白い翼の桃色の紅鶴などの群が一つどきの長い帯に様々の色を並べたやうに、岸に沿つて列を作りながら魚を漁る。それからイビス、本當のエジプトのイビスが、きら／＼した太陽の光を浴びて、この静かな水郷をふるさとのやうに楽しんでゐる。私のある場所から聞えるのは實に、打ち寄せる漣の音と岸邊に散つた馬を呼び返す番人の聲ばかり。馬は皆響のいゝ名前を持つてゐる。「ジフェール!……」(リュシフェール)……「レステロ!……」(レスツルネロ)……「名前を聞くとそれ／＼鬣を靡かせて駆け返り、番人の手から燕麥を食べる……」

矢張り同じ岸邊の更に遠くには、馬のやうに自由に草を食べてゐる牛の多くの「群」がある。時々檉柳の叢越しに彼等の曲つた脊稜と、眞直に立つ三日月形の小さな角が見える。之等カマルグの牛の大部分は牛祭といふ村の祭りで競争をするために育てられる。さうして或るものは既にプロヴァンスやラングドックの見世物小屋で盛名を馳せてゐる。ところで隣りの群には、中でもル・ロマンと呼ぶ恐ろしい猛者が數へられてゐる。彼はアル、やニームやタラスコンの競技場

で、どの位人や馬を引き裂いたかわからない。それで彼の仲間も彼を頭と仰いだ。といふのはこの不思議な群では、牛達はその先達と戴く老つた牡牛を中心にして、自治の生活を行つてゐるからである。一度颯風がカマルグの地、何物もこの颯風を外らし、之を止めるものもない此の大平原に猛烈な勢となつて襲つて来る時、牛の群が長の後にかたまつて頭を低く伏せ、牛の力の集中してゐるその大なる額を風の方向に向けるのは見ものである。我がプロヴァンスの羊飼達はこの動作を、ヴィララバノオヂスクル——角を風に向ける——と稱へてゐる。これに應じた牛の群こそ哀れである! 雨に眼が眩み、颯風に奔弄されて潰亂した群は、グル／＼まはり、驚愕して四散し、かうして迷へる牛は、嵐を逃れんとして、眞しぐらに馳せて、或はローヌに或はヴァカレスの湖に、或は海に墜落してしまふのである。

兵
舍
懷
し

今朝、夜の白々と明け初むる頃、凄じい太鼓の轟にハッとばかり夢を破られた……ラン、プラン、プラン、プラン！ ラン、プラン、プラン！……

こんな時刻に松林の中で太鼓が鳴る！……こいつは妙だ。
大急ぎで寢床から飛び下り、走つて行つて戸を開ける。

誰も居ない！ 音も止んだ……露に濡れた野葡萄の中から、二、三羽のたいしやく鶺鴒が羽ばたきをしながら飛んで行く……幽かに林を渡る微風の歌……東の方では、アルピーユの山々の綺麗な頂上に、金色の露が重なつて、其處から静かに太陽が昇つて行く……最初の光が、もう風車の屋根を掠めた。同時に姿の見えぬ鼓手が、木陰で敬禮の太鼓を鳴らし始める……ラン……プラン……プラン……プラン、プラン、プラン、プラン！

頼い太鼓だ！ すつかり忘れてゐた。だが一體森の奥へ太鼓を提げて来て、曙を迎へる野人は何者だ……眺めたけれど、何一つ見えぬ……ラヴァンドの繁みと、麓の往來まで馳せ下る松林ばかり……多分彼方の木立の中に誰か悪戯者が隠れてゐて、私を揶揄つてゐるのだらう……きつとアリエルの奴だ、でなけりやピュックの大將だ。先生風車の前を通つてから考へたんだらう。

——彼處の巴里の旦那はちつと静かすぎるから、朝の曲をやつてやれ、つて。
そこで大きな太鼓を持ち出して……ラン、プランプラン！……、ラン、プラン、プラン、プラン！……お静かに、意地悪のピュックさん！ 蟬が眼を覺ましますよ。

ピュックではなかつた。通稱をピストレといふ、ゲゲ・フランソワであつた。歩兵第三十一聯隊の鼓手で、今は一期末の休暇中だ。此の土地に倦きたピストレ鼓手は旅愁を感じて、——村の樂器を貸して貰ふと、——打ち沈み勝ちにフランス・ウジェーヌ街の兵營を夢見ながら、林の中へ太鼓を敲きに出かけて行く。

今日は私の居る緑の岡へ来て思ひ出に耽つてゐる……彼處で、松の木に倚り掛つて、太鼓を兩脚の間に置いて喜びを恣にしてゐる……驚いた鶺鴒が足元から飛び立つが氣が附かない。周圍に薫るフェリゲルの香も彼には達しない。

枝の間に陽に輝いて顫へる繊細な蜘蛛の帳にも、又、太鼓の上で踊る松の葉にも眼をくれない。たゞ身も心も夢を追ひ、樂の調べに溶け入つて、撥の躍るのを恍惚と眺めるばかり。太鼓の鳴る毎に人の好い大きな顔が喜びに綻びる。

ラン、プラン、プラン！ ラン、プラン、プラン！……

『なんて立派なんだ、大きな兵營は。廣い鋪石を敷きつめた前庭、よく整列した窓の並んでゐること、兵卒略帽を被つた人達、皿小鉢の音で一杯の低い拱廊！……』

ラン、プラン、プラン！ ラン、プラン、プラン！……

『あゝ！ よく響く階段、白堊塗りの廊下、ぶんと匂ふ兵卒部屋、磨き出した帶革、パン板、靴墨入りの壺、灰色の蒲團の載つた鐵製の寢臺、銃架に輝く鐵砲！』

ラン、プラン、プラン！ ラン、プラン、プラン！

『あゝ！ 衛兵勤務の楽しい生活、指で汚れたトランプ、ペンで悪戯書きをした醜いスペースの女王、衛兵床に轉つた頁の抜けた古いピゴ・ルブランの作品！……』

ラン、プラン、プラン！ ラン、プラン、プラン！

『あゝ！ 官省の門前で歩哨に立つ夜の長さ、古い哨舎には雨が入り、足が冷たい！……盛裝を凝らした馬車が、通りがかりに泥を跳ねかす……あゝ！ 追加の雑役、營倉の數日間、臭い桶、板の枕、雨の朝の寒さうな起床喇叭、瓦斯が點る頃、霧の中に響く歸營喇叭、息をはづませて歸る夕の點呼！』

ラン、プラン、プラン！ ラン、プラン、プラン！

『あゝ！ ヴァンセンヌの森、白木綿の大手袋、お堀の土手の上の散歩……あゝ！ 士官學校の界限、兵士相手の女達、軍神軒のピーピー喇叭、寄席で引つかけるアプサント、吃逆から始まつて吃逆で終る打ち明け話、抜き放つ短劍、片手を胸に當て、歌はれる感傷的な戀愛詩！……』

夢を見るがいゝ、夢を。氣の毒な人よ！ 私は邪魔はしない……思ひ切り太鼓の胴を敲くがいゝ、腕を振り廻して敲くがいゝ、私には君を嗤ふ資格はないんだ。

君に兵舎がなつかしいなら、私にも私の旅愁がありはしないだらうか。

私の巴里も君の巴里のやうに此處まで私を追跡する。君は松の木の下で太鼓を敲く！ 私は此處で書き物をする……けれど私達は善良なプロヴァンス人なのだ！ あの巴里の兵舎では青いア

ルピーユの山々やラヴァンドの野生の香を懐しく思つてゐた。それが今このプロヴァンスの眞中にゐると、兵舎がない、そして兵舎を思はせるものは懐しいんだ！……

村で八時の鐘が鳴る。ピストレは撥を手から離さずに歸途に就いた……休まず敲きながら林の下を下りてゆくのが聞える……そして私は草の中に寝轉んで旅愁にかゝり、遠ざかつてゆく太鼓の音を聞きながら、巴里全體が松林の間に展開するのが見えるやうな氣がする……

あゝ！ 巴里！……巴里！……やつぱり巴里だ！

行人の足音

註

- 一〇 プロヴァンス州 フランスの東南部、地中海に面せる地方。
- 一六 ジェンマツプ ベルギーの小邑、一七九二年、佛軍此處に壞軍を破る。附近の風車で作戦計畫がなされた。
- 一七 アルビーユ ドーデーの風車から北方、二、三里のところを東西に走る小山脈
- 二一 ボーケール アル、の近くにあり町の名、ローヌ河を隔て、タラスコンに對す。
- 二三 カマルグ ローヌ河口の大きな三角洲、沼地多し。牛、馬、羊等が放牧されてゐる。
- 三〇 ミストラル プロヴァンス地方、特にローヌ河の流域を猛烈に吹き捲る北風。
- 三二 フアランドル プロヴァンス地方特有の踊。手をつないで圓陣を作り、笛、太鼓に合わせて踊る。
- 三三 トラモンターヌ フランス南部を吹く北風。
- 四〇 プレパン亭 巴里モンマルトル街の當時有名な料理店。
- 四二 エスメラルダ ユーゴーの小説「ノートルダム・ド・パリ」に現れる美人。常に金の角を持つた山羊を伴ふ。
- 六二 アル、プロヴァンス地方の古都、往時繁榮す。
- 六六 アヴィニオン 南佛の古都、嘗て法王宮あり。
- 七〇 イヴトリーの法王 フランスの詩人ベランジェ（一七八〇—一八五七）の作「イヴトリー王」の主人公は野心なく善良、圓満、無邪氣な王様である。

- 七〇 ジャンヌストン イヴトー王の愛人。
- 四四 アイオリ プロヴァンス料理の一種、鱈と野菜の茹たのに藍の入ったマヨネーズソースをかける。
- 四四 アイヤベス マルセイユ料理、魚と野菜とパン入りのスープ。
- 六六 プリユタルク傳 プリユタルク(ギリシャの史家、紀元前二八三年頃死す。)の「偉人傳」のこと。
- 八八 デメトリオス・ド・ファレール ギリシャの政治家。
- 一〇〇 鶏が歌ふのは聞えなかつた ペテロが鶏が鳴く前に三度キリストを知らないと言つた新約聖書の故事による。
- 一七二 クロー ローム河口の小石の多い瘠せ野原。
- 一七八 スデーヌ フランスの作家、一七一九—一七九七。
- 一三八 ハイブリッヒ・ハイネ 鷗逸の詩人、一七九九—一八五六。
- 一三九 オラース ラテンの詩人、紀元前六四—前八。
- 一三九 ヴォーヂュ フランスの東北の一地方、山地。
- 一三九 エルクマン||シャットリアン フランスの作家、前者は一八二二—一八八九。後者は—一八二六—一八六九。常に連名にて執筆。
- 一四三 デュルイ氏 當時の文部大臣。
- 一四六 シャル、・バルバラ フランスの作家、一八六六年巴里に死す。
- 一五三 フレデリック・ミストラル プロヴァンス州の生んだ大詩人、一八三〇—一九一四。

- 一五二 モンテーニユ フランスの作家、論集の作者として有名。一五三三—一五九二。
- 一五三 ミレイユ ミストラル作の長詩、プロヴァンスの風物を諷ふ。一八五九年作。数年後巴里にて歌劇として上演さる。
- 一五四 腕のないヴィナス ミロのヴィナスのこと。
- 一五六 ヘルクレスの十二業 ヘルクレス(ギリシャ神話に現はれる人物)のなせる十二の力技ちからわざ。
- 一七四 ニスー 當時のニスーは邦貨の二錢位。
- 一七五 プリダー アルジェリアの都邑。
- 一八〇 ニーム 南佛の大都、ドーデーの生地。
- 一八八 ボール・ド・コク フランスの作家、一七九四—一八七一。
- 一八八 ラ・ボエシ フランスの作家、モンテーニユの親友、一五三〇—一五六三。
- 一九二 イスカリオテのユダ キリストの十二使徒の一人。單にイスカリオテともいふ。此處では裏切者の意。
- 一九三 ジャックさん モリエールの「吝嗇」アルツァールに出てくる人物。料理術と暇番とを愛ぬ。ハルバゴンに仕ふ。
- 一九六 ルナン フランスの史家、哲學者、一八二二—一八九二。
- 一九六 クスクス アラビア料理の一種、肉たんごのやうなもの。
- 一九七 シロコ 地中海沿岸を吹く南東熱風。
- 一九八 ミラクル廣場 十七世紀頃巴里にありし乞食の巢窟。
- 一九八 プリス男爵 美食家として有名、毎日名料理を發表して知らる、一八一三—一八七六。
- 二〇〇 エラスムス オランダの作家、一四六七—一五三六。

註

- 二〇 ダスシー フランスの作家、一六〇五—一六七五。
- 二四 サン・トロフィーム寺院 アル、の町にあつた有名な寺院。
- 二六 フェニモア アメリカの冒険小説家。一七八九—一八五一。
- 三一 赤と白 赤は共和黨、白は王黨。
- 三三 プトレメ エチプト王家の名。
- 三五 テオクリトスの牛飼 テオクリトス（ギリシャの詩人）の作品中に現はれる牛飼。
- 三八 アリエル 大氣の精。
- 三八 ビユック いたづら 悪戯な精。
- 四〇 ビゴ・ルブラン フランスの作家、一七五三—一八三五。

(大森製本)

昭和七年七月十五日印
昭和七年七月廿一日發行

風車小屋だより ★★
定價四十錢

岩波文庫
830-831

譯者	櫻田佐
發行者	東京市神田區一ツ橋通町三番地 岩波茂雄
印刷者	東京市神田區錦町三丁目十七番地 白井赫太郎

精興社印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話一八七〇〇
九段二〇三番小賣部
振替口座東京二六二四〇番

柳多留 中卷 西原柳雨校訂 ★★
 柳多留 下卷 西原柳雨校訂 ★★
 萬載狂歌集 野崎左文校訂 ★★
 德和歌後萬載集 野崎左文校訂 ★★
 松の落葉 藤田徳太郎校註 ★★
 閉吟集 藤田徳太郎校註 ★★
 好色一代男 西田萬吉校訂 ★★
 好色一代女 西田萬吉校訂 ★★
 好色五人女 西田萬吉校訂 ★★
 日本永代藏 西田萬吉校訂 ★★
 世間胸算用 西田萬吉校訂 ★★
 西鶴織留 西田萬吉校訂 ★★
 武家義理物語 西田萬吉校訂 ★★
 椿説弓張月 上卷 西田萬吉校訂 ★★
 椿説弓張月 中卷 西田萬吉校訂 ★★
 椿説弓張月 下卷 西田萬吉校訂 ★★

浮世風呂 和馬三馬校訂 ★★
 浮世風呂 和馬三馬校訂 ★★
 東海道膝栗毛 十返舎一九作 ★★
 加賀 河竹雲俊校訂 ★★
 赤垣源藏・仲光 河竹雲俊校訂 ★★
 忍屋の徳助 河竹雲俊校訂 ★★
 孝子善吉 河竹雲俊校訂 ★★
 鼠小僧 河竹雲俊校訂 ★★
 實録先代萩 河竹雲俊校訂 ★★
 笠森 河竹雲俊校訂 ★★
 鴉の平右衛門 河竹雲俊校訂 ★★
 小説・戯曲・詩歌・隨筆・評論
 こゝろ夏目漱石著 ★★

道草 夏目漱石著 ★★
 行旅 夏目漱石著 ★★
 草廬 夏目漱石著 ★★
 坊つちやん 夏目漱石著 ★★
 五重塔 幸田露伴著 ★★
 風流佛・一口劍 幸田露伴著 ★★
 二人女 房尾崎紅葉著 ★★
 觀音岩 前篇 川上眉山著 ★★
 觀音岩 後篇 川上眉山著 ★★
 たけくらべ 樋口一葉著 ★★
 うたかたの記(他三篇) 鷗外著 ★★
 新曲 蘇峰 島坪内道彦著 ★★
 新曲 蘇峰 島坪内道彦著 ★★
 運命論者 他二篇 岡本野矢著 ★★
 源をち 他二篇 岡本野矢著 ★★
 號外 他六篇 岡本野矢著 ★★
 櫻の實の熟する時 島崎藤村著 ★★

千曲川のスケッチ 島崎藤村著 ★★
 幸福者 武者小路實篤著 ★★
 蒲團・一兵卒 田山花袋著 ★★
 田舎教師 田山花袋著 ★★
 小僧の神様 他十篇 志賀直哉著 ★★
 和解 或る男 志賀直哉著 ★★
 其姉の死 志賀直哉著 ★★
 陸奥直次郎 長興吾郎著 ★★
 青銅の基督 長興吾郎著 ★★
 偷盜 芥川龍之介著 ★★
 厭世家の誕生 日佐藤春夫著 ★★
 (他六篇)
 入江のほとり 正宗白鳥著 ★★
 生まざりしならば 正宗白鳥著 ★★
 大石良雄 野上彌生子著 ★★
 海神丸 野上彌生子著 ★★
 出家とその弟子 倉田百三著 ★★
 布施太子の入山 倉田百三著 ★★
 その妹 武者小路實篤著 ★★

人間萬歳 武者小路實篤著 ★★
 波 山本有三著 ★★
 病牀六尺 正岡子規著 ★★
 墨汁一滴 正岡子規著 ★★
 仰臥漫録 正岡子規著 ★★
 子規歌集 正岡子規著 ★★
 左千夫歌集 上野文吉選 ★★
 左千夫歌論抄 上野文吉編 ★★
 上田敏詩抄 茅野蕭々編 ★★
 晚翠詩抄 土井晩翠著 ★★
 藤村詩抄 島崎藤村自選 ★★
 有明詩抄 蒲原右明著 ★★
 泣菫詩抄 蒲田泣菫著 ★★
 泣菫詩抄 蒲田泣菫著 ★★
 文道遙遺稿 金築松桂譯 ★★
 歌舞音楽略史 小中村清矩著 ★★
 俗樂旋律考 上原六四郎著 ★★
 蘭學事始 野上彌一校訂 ★★

茶の木の 本岡會三著 ★★
 網島梁川集 安倍能成編 ★★
 清澤文 集 清澤藪之著 ★★
 福澤撰 集 福澤諭吉著 ★★
 北村透谷集 島崎藤村編 ★★
 海舟座談 本善治編 ★★
 外國文學(小説・戯曲・詩)
 杜 詩 卷之一 漆山又四郎譯註 ★★
 杜 詩 卷之二 漆山又四郎譯註 ★★
 杜 詩 卷之三 漆山又四郎譯註 ★★
 杜 詩 卷之四 漆山又四郎譯註 ★★
 陶淵明集 漆山又四郎譯註 ★★
 唐詩選(附作者) 上卷 漆山又四郎譯註 ★★
 唐詩選(附作者) 下卷 漆山又四郎譯註 ★★
 即興詩人 上卷 森 聰 外譯 ★★
 即興詩人 下卷 森 聰 外譯 ★★
 プラトン ドイブセ 俊譯作 ★★

認識の對象 **リフケルト** 著 山内邦立譯 ★★
 作り上げた利害 **ベト** 著 永田寛定譯 ★★
 子守唄 **シエル** 著 永田寛定譯 ★★
 希臘羅馬神話 **パルフィン** 著 野上彌生子譯 ★★
 フォーラス博士 **マロ** 著 尾相譯 ★★
 パーリズ詩集 **中村爲治** 譯 ★★
 エヴァンジェリン **ロング** 著 藤野野矢譯 ★★
 クリスマス・カロール **森田草平** 譯 ★★
 ニング **サウル** 著 藤野野矢譯 ★★
 七 大 哲 人 **オイケン** 著 安倍能成譯 ★★
 科學の價值 **田邊元** 著 元譯 ★★
 科學と方法 **ボアンカレ** 著 吉田洋一譯 ★★
 科學者と詩人 **ボアンカレ** 著 吉田洋一譯 ★★
 將來の哲學 **フオイエル** 著 植村晋六譯 ★★
 根本命題 **植村晋六** 譯 ★★
 史的に見たるスワンナー **アレニウス** 著 寺田寅彦譯 ★★
 科學的宇宙觀の變遷 **寺田寅彦** 譯 ★★
 自然認識の限界についで **ボアンカレ** 著 吉田洋一譯 ★★
 いて宇宙の七つの謎 **板田徳男** 著 板田徳男譯 ★★
 自然に於ける美 **ソロウ** 著 高村理智夫譯 ★★
 藝術の一般的意義 **高村理智夫** 譯 ★★

ケーベル博士隨筆集 **久保能成** 譯 ★★
 カントとゲエテ **谷川徹三** 譯 ★★
 フォーブル昆蟲記 **山田吉彦** 譯 ★★
 第二分冊・第九分冊・第十分冊
 第十二分冊・第十三分冊・第十四分冊
 第十七分冊・第十八分冊
 第七分冊・第八分冊
 種々の起原 **小泉丹** 著 ★★
 人及び動物の表情について **澤中瀧太郎** 著 ★★
 雑種植物の研究 **小泉丹** 著 ★★
 生命の不可思議上巻 **後藤格次** 著 ★★
 生命の不可思議下巻 **後藤格次** 著 ★★
 回想のゼザンヌ **有島生馬** 著 ★★
 この人を見よ **安倍能成** 著 ★★
 ミル **自傳** **西本正美** 著 ★★
 佛蘭西文學史 **藤村** 著 ★★
 伊太利文藝復興期の **ブルックハルト** 著 ★★
 文化 **上卷** **村松恒一** 譯 ★★

ペーター論集 **田部重治** 著 ★★
 ラフカディオ・東洋文藝評論 **三谷義三郎** 著 ★★
 戀愛論 **上卷** **前川聖市** 著 ★★
 戀愛論 **下卷** **前川聖市** 著 ★★
 戀愛と結婚 **上卷** **原田實** 著 ★★
 戀愛と結婚 **下卷** **原田實** 著 ★★
 愛と結婚 **下卷** **原田實** 著 ★★
 アウグスティンの **フォン・ハルナック** 著 ★★
 唯一者とその所有 **上卷** **草間平作** 著 ★★
 唯一者とその所有 **下卷** **草間平作** 著 ★★
 エミール (第一篇) **平林初之輔** 著 ★★
 エミール (第二篇) **平林初之輔** 著 ★★
 エミール (第三篇) **平林初之輔** 著 ★★
 懺悔錄 **上卷** **石川巖** 著 ★★
 懺悔錄 **中卷** **石川巖** 著 ★★
 懺悔錄 **下卷** **石川巖** 著 ★★
 獨逸國民に告ぐ **大津康** 著 ★★

法律・社會・政治・經濟

文明論之概略 **羅澤禮** 著 ★★
 法的精神 **上卷** **モンテスキュー** 著 宮澤俊義譯 ★★
 法的精神 **下卷** **モンテスキュー** 著 宮澤俊義譯 ★★
 權利のための闘争 **日沖憲郎** 著 ★★
 民約論 **平林初之輔** 著 ★★
 國富論 **上卷** **氣賀勳** 重譯 ★★
 國富論 **下卷** **氣賀勳** 重譯 ★★
 勞働者綱領 **小泉信三** 譯 ★★
 哲學の貧困 **木下平治** 著 ★★
 資本論初版鈔 **長谷部文雄** 譯 ★★
 猶太人問題を論ず **久留間政述** 著 ★★
 自然辯證法上巻 **加古祐二** 譯 ★★
 自然辯證法下巻 **加古祐二** 譯 ★★
 住宅問題 **加田哲二** 著 ★★
 エングルス原始基督教史考 **カウツキ** 著 基督教の成立 喜多野清一譯 ★★

家族・私有財産及エンゲルス **家** 著 ★★
 國家の起源 **西** 著 ★★
 フォイエルバッハ論 **佐野文夫** 著 ★★
 反デュリング論 **上卷** **長谷部文雄** 譯 ★★
 反デュリング論 **下卷** **長谷部文雄** 譯 ★★
 エンゲルスと科學 **上卷** **長谷部文雄** 譯 ★★
 エンゲルスと科學 **下卷** **長谷部文雄** 譯 ★★
 帝國主義 **長谷部文雄** 譯 ★★
 唯物論と經驗 **上卷** **佐野文夫** 著 ★★
 唯物論と經驗 **下卷** **佐野文夫** 著 ★★
 唯物論と經驗 **中卷** **佐野文夫** 著 ★★
 唯物論と經驗 **下卷** **佐野文夫** 著 ★★
 經濟學及課税之原理 **小泉信三** 譯 ★★
 道徳の經濟的基礎 **草間平作** 著 ★★
 藝術經濟論 **西本正美** 著 ★★
 建築の七燈 **高橋松川** 著 ★★
 この後の者にも **西本正美** 著 ★★
 地代論 **山口正吾** 著 ★★

ベール人論 **上卷** **草間平作** 著 ★★
 ベール人論 **下卷** **草間平作** 著 ★★
 近代民主政治 **上卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **下卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **三卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **四卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **五卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **六卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **七卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **八卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **九卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十一卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十二卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十三卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十四卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十五卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十六卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十七卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十八卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **十九卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十一卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十二卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十三卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十四卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十五卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十六卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十七卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十八卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **二十九卷** **松山武** 著 ★★
 近代民主政治 **三十卷** **松山武** 著 ★★

御註文に就て

此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。
 内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、価値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。
 最低の廉價 出来る丈安く手に入れら

れる様に、小さい形の中に、深山の内容を盛る形式を採りました。

□購求自由 しかも読者が全く自由に欲し、本を随時求められる自由選擇の方法を採りました。

印刷の鮮明、校正の精確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。

□體裁は菊半裁判、紙裝、平福百穂畫伯裝幀

□活字は八ポイントを用ひました。

□約百頁を單位として星一つを以てそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。

□★一つたゞに算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。

□番號はただ發行順に従つて之を追ふものであります。

□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。

□送料(及び定價)は左表の通りです。

★ 定價二十錢 送料二錢
 ★★ 四十錢 四錢
 ★★★ 六十錢 四錢
 ★★★★★ 八十錢 六錢

★★★★★ 一圓 六錢
 □御注文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なものですから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割増に願ひます。

◇岩波文庫新刊書日◇

源氏物語 四 鳥津久基校訂 ★★

三條西榮花物語中卷 三條西公正校訂 ★★

煤 煙 森田草平作 ★★

支那通俗古今奇觀 青木正兒譯 ★

獅子座の流星群 ロマン・ロラン作 ★

史科學的に見たる 科學的宇宙觀の變遷 スワントン・ブレイニウス著 寺田寅彦譯 ★★

F53
D45a₁

終